「走らなあかん、夜明けまで」　大沢在昌

紹介者：榎本博康

[紹介]

東京生まれ、東京育ちで箱根の山より西に行ったことのない会社員、坂田勇吉は生まれて初めての大阪出張に。夕方に着いて、そのまま予約してもらったホテルへ、という前に、将棋会館の展示室を見学に。長年名前が似ていることでもあこがれていた、坂田三吉の遺品を見て、模造の三吉の扇子を土産に買う。まだ二十代の独身男性としては、実にじみな趣味だ。

所がそこでカバンをちょっとした隙に持って行かれる。大事な明日の会議資料が入っているのだ。実は後でだんだん分かってくるのだが、ヤクザ同士の取引が行われる段取りになっており、酷似していた彼のカバンが間違えられたのだ。ほとんど訪れる人の少ない展示室であり、あの男ではと追い駆ける。男は自転車に乗り、前のかごにそのカバンを入れている。

これが、はからずも大阪ヤクザと捨て身で渡り合う、長いながい夜の始まりだった。

[感想]

大沢在昌氏はハードボイルド作家と分類されるが、代表作は刑事鮫島が活躍する「新宿鮫シリーズ」と言われ、8冊が出版されている。本書は「不幸な坂田シリーズ」と言われて、北海道を舞台にもう1冊が書かれている。映画「ダイハード」のように、不幸にも事件に遭遇してしまい、心ならずも頑張るしかなくなる話はよくあるが、坂田は気が弱い、一介のサラリーマンという設定である。従って、派手なアクションシーンはやりたくてもできない。やられっぱなしだ。

まず大阪文化との出遭いから始まる。私も以前は箱根の山の向こうは、さっぱり分からない東京育ちであり、坂田の戸惑いが良く分かる。丁度今テレビで、初めて大阪に来た地方出身の大学一年生に、関西文化を指導する番組をやっているが、非大阪人を見分ける方法として、かに道楽のコマーシャルソングを用いている。関西人は百パーセント知っていて、その他の地域の人は全く知らない、そのような文化がある。

その大阪での追跡劇だ。相手は自転車で、こちらは走りだから、普通なら全く歯が立たないが、そこが大阪だ。夕方の交通渋滞に加えて、路側に大阪名物の違法駐車なので、自転車は歩道を走るしかない。信号あり、踏み切りありで、坂田との差が開かない。とは言え、坂田は必死で走って何とか食らいついている状態だ。ＪＲ環状線福島駅付近から、地下鉄西梅田駅まで来た。ここで男は坂田に恐れを感じ、自転車を捨てて地下に走りこむ。そのまま東梅田、梅田と走り……このように駅が地下街で繋がっているのも大阪らしいといえばそうだ……男は御堂筋線に乗りこむ。なんばで降りた男をさらに追い、ともう少し走るが、ここから先は、電車と車による移動となり、足を使った走りはおしまいだが、気持ちは休む暇もなく走りっぱなしということだ。

途中見失いながらも何とか追いついていかないと話が終わってしまうので、そこは娯楽小説、

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

ラッキーにも群集のなかにちらりと見かけて追い続けるが、実際には非常に難しい場所で、連れとはぐれないようにするだけでも大変な所だ。既に走ることが有り得ない街に作られており、散歩やジョギングといった風景とは無縁だ。作中人物にそこを走らせるというのは、街の日常を乱す行為であり、またこの街を別の機能から見つめ直す行為である。

さて、これは最近良く言われる危機管理の話と読むこともできる。坂田はヤクザに殴られてぐちゃぐちゃにされながらも、頑張る。頑張れる背景として、彼のかばんの中の新製品ということもあるが、追跡中に知り合って、大阪の街を案内してくれた水商売の女性、真弓がヤクザに捕まっているので、彼女に危害が加えられないためにも、逃げたらいけないという誠実さがある。

かれは自分のちょっとした不注意で、カバンから離れて災難を引き起こした。まず危機管理は災害を未然に防止しなければならない。そして次に起こってしまった場合の対応だ。「警察にタレ込んだら、女、ナンコウ(南港)に沈めたるで」、と脅されて警察が使えない設定だ。そこで、右も左も分からない大阪で、ひとり頑張らなければならない。実社会での危機管理の対応のまずさとして、最近は雪印が有名だが、三菱自動車のリコール隠しなど、多くある。情報公開の現在、隠すことは不可能になってきているのだ。そうであれば、この坂田が、真弓を助けなければと誠実に闘い続けたように、企業の危機管理でも、個人の危機管理でも、顧客とか家族とかを見据えて、誠意をもって行動する他にない。逃げずに真正面からことに当たる気構えを持つことだ。

坂田は一夜で、大阪ヤクザという限られた範囲ではあるが、大阪通になった。何かを知るには体を使うのが手っ取り早い。かなり痛いこともあるが。

(初稿2001.5.15)

[リバイバル感想]

大阪には年に数回は行くが、観光では無いので目的地への直行・直帰でなかなか大阪が分からない。数年前に1970年大阪万博会場を50年近くぶりに訪問して、感慨深かった。

さて、本書ほどでは無いが、大阪を歩くのは大変だったことが多い。その時は淀屋橋にやや近い場所から、伊丹空港に行こうとしていた。大阪での用事と、九州での用事があり、それぞれのための２個のキャリーバッグを持っていた。当面の目的地は阪急梅田駅で、蛍池乗り換えモノレールで空港に着くつもり。タクシーの利用も考えたが、検索すると20分程度で行けそうなので、歩き好きの私としては当然のように徒歩の選択をした。途中で入口を見かけ、何となく良さそうなので地下街に入ると、はてさて勝手が分からない。大体案内板の地名が分からない。阪急、阪神は同じように見えてとっさには区別がつかない。スマホの地図アプリも分かりにくい。そして地下街は平らでは無かった。上下移動があり、エスカレータに乗ると、様子が違うのにすぐに気づいた。左側に乗ってしまったが、思わず「いけない、大阪だ。」とつぶやいて右側に入れてもらった。間髪入れずに舌打ちの音が。はいはい、田舎者ですみませんと心中でつぶやく。

おそらく30分はかかって阪急梅田駅に着いた。着いたが油断できない。阪急・阪神問題があるので、ここで間違いが無いかをよーく確認する。大丈夫だと確信して改札を通過すると、何

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

と10本くらいのホームが横にずらっと並んでいる。そして案内板には知らない地名の行先が幾重にも並んでいる。そして電車の発車の合図とともに目まぐるしく表示が変わっていく。運試しのあみだくじ状態だ。アタリはどれだ。

まあ、汗だらけになって、途中でモノレールに乗り換えて伊丹空港に着く。すぐに終わった方の仕事のスーツケースを宅急便で送り、離陸までのあわただしい時間で夕食をとる。初の伊丹空港を探索する余裕は全く無かった。飛行機の座席に着いて寝落ちした。乗り過ごしの心配が無いのは良いことだ。

ついでにもう一つ挙げれば、何回行ってもスムーズに到着できないのが梅田CLUB QUATTROだ。JR大阪駅で降りて、そこから徒歩で行くが、地下は見通しが利かないことと、案内板の地名が分からないことと、伊丹空港への黒歴史もあるので、見通しの良い地上を選ぶ。だいたいの方角は分かっているのに道を横断できなかったりして、どんどんと行きたい方向から逸れていくので、時間が倍くらいはかかってしまう。一方帰りは目の前の地下道入口から降りると、大阪駅への案内板だけを見ていればすぐに到着する。次に機会があれば、往きもこの近道にチャレンジしてみよう。いつまでもお上りさんではいられない。

(2021.8.21)

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.